

歴史を共にする新たな広島風景

これからの時代の広島の歴史観を育む

宮本皓章

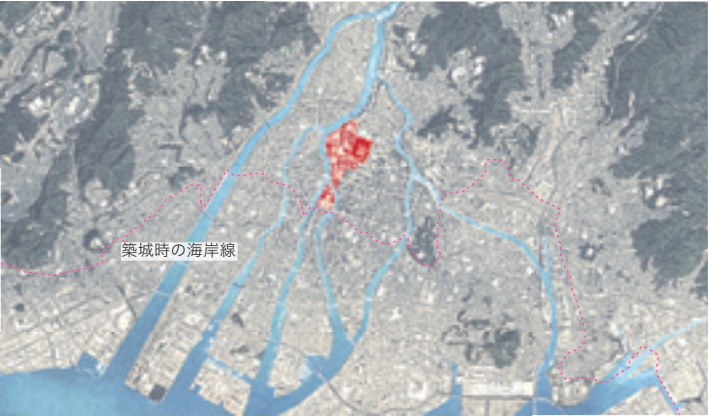


project concept

様々な歴史が積み重なる広島市中心部には、それぞれの時代を象徴するモニュメントや都市構造がのこる。しかし、平和都市としてのイメージが強く存在する広島は、まちの他の様々な魅力や歴史の深さについて考えたり、思いを馳せたりすることに不自由である。本プロジェクトでは原爆投下というまちの悲惨な歴史を、まちの大きな歴史の一部に捉え直し、広島で暮らす人や、訪れる人の歴史観を開放する。そうすることで、都市での経験そのものがより多くの広島の歴史やアイデンティティと繋がりをもち始め、まちは、その歴史や土地から生まれる様々な豊かさを謳歌できる都市空間へと変わっていく。

project site：歴史が積み重なる広島市中心部

南を瀬戸内海に面した広島は、太田川を主流とする三角州によって、東西北を丘陵地に取り囲まれた市街地を形成している。かつて城下町として栄えた広島はその後近代化に伴い軍都としての役割を担い、1945年の原爆投下の日を迎える。今日まで力強く復興してきた広島の都市空間には、そうした各時代を象徴するモニュメントや都市構造が残り、その歴史の重層性を体現している。



広島市航空写真（赤：歴史公園）

広島城築城 — 戦国時代



軍都広島 — 戦時中



原爆投下 — 1945年



高度経済成長 — 昭和中期



site history：広島に歴史がまちに残すモニュメントと都市構造



background：覆い隠される歴史の連続性

広島の子どもたちは原爆の悲惨さと平和の尊さを平和記念公園への課外学習などを通して学ぶ。また、丹下健三が与えた記念資料館—慰霊碑—原爆ドームを結ぶ軸線は崇高化され、人々にまちの見方を強いている。こうした平和都市としての役割をもった広島の都市空間は、そこで育つ子どもたちや、初めてまちを訪れる人たちにとって、まちの他の様々な魅力や歴史の深さについて考えたり思いを馳せたりすることに不自由である。



歴史の見方を強いる都市空間



objective：広島に歴史の見方を開放する

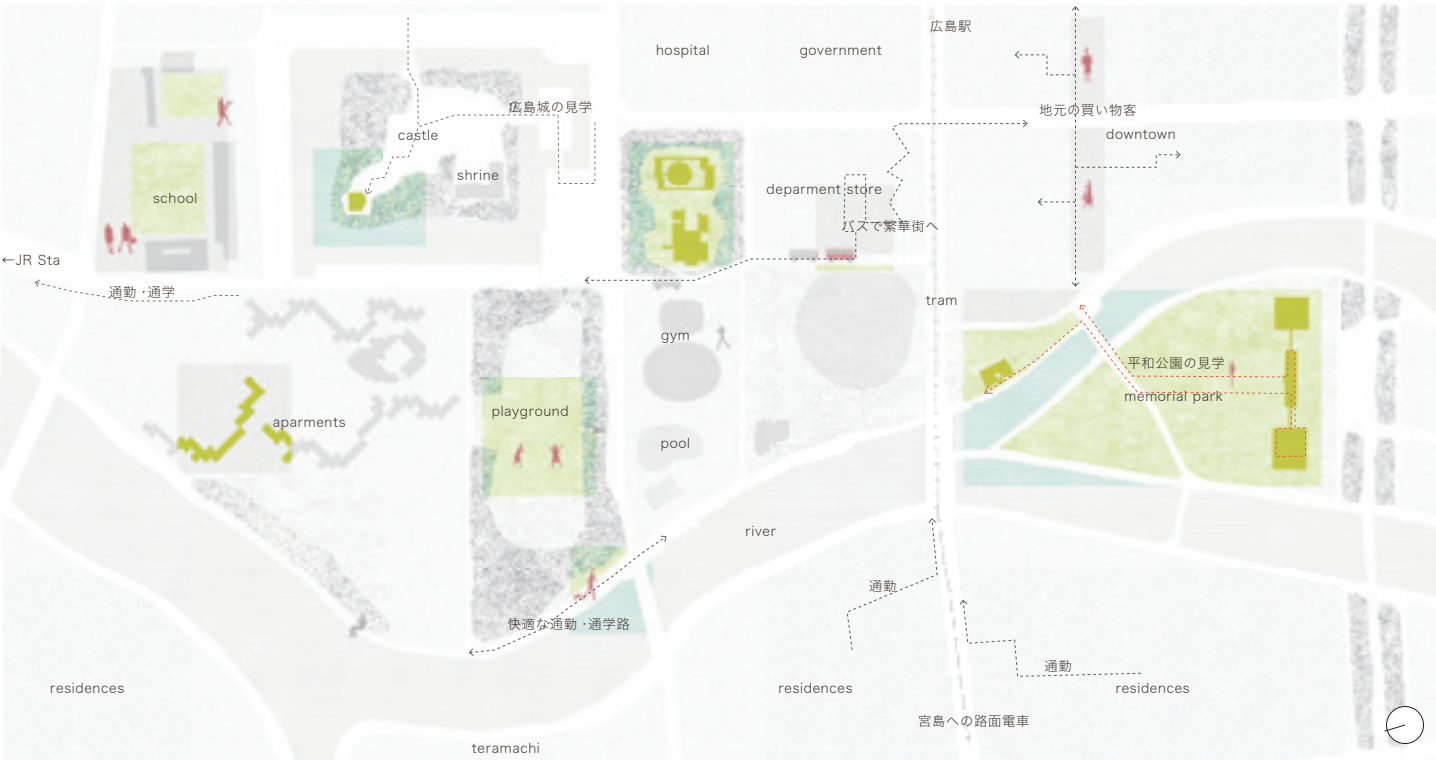
平和都市としてのイメージは、それまでの広島の歴史や、その歴史の重層性を体現した都市空間を覆い隠している。そこで、本プロジェクトでは原爆投下という歴史を、まちの歴史の一部に位置づけ直すことで、広島の歴史観を開放する。そうすることで、都市での経験そのものが、より多くの広島の歴史やアイデンティティと繋がりをもち始め、まちは、その歴史や土地から生まれる様々な豊かさを享受・謳歌できる都市空間へと変わっていくと考える。



これからのこどもたちに新たな広島の歴史観を育む

The Image of the City : 断片的な広島イメージ

広島市中心部をみると街区によってそこが担う機能がはっきりと別れている。もともと城内であった地区は近代化に伴い軍用地となり、現在は官庁建築や公共施設が立ち並びエリアとなっている。路面電車を挟んで向かい側に旧西国街道である本通り商店街からなる繁華街がつづく。そうしたまちのイメージの背景には原爆投下や城下町であった歴史がつくる都市構造がある。`



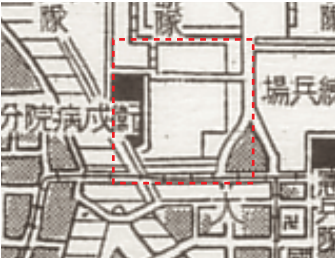
断片的な広島イメージ

site : 旧広島市民球場跡地

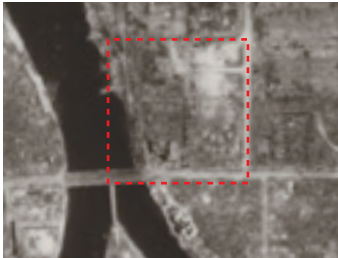
現在空き地となっている市民球場跡地は広島各時代において、それぞれの時代を象徴するような都市機能や役割があった。



武家屋敷が並ぶ (〜江戸)



軍事機能 (戦時中)



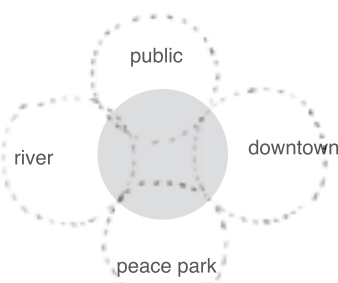
原爆スラム (戦後)



市民球場 (1957)

site diagram : 場所のイメージの構造化

この場所や市民球場跡地が持っているイメージを構造化し、建築に応用する。そこから生まれる建築は”都市と建築の間のような建築”になり、都市的創成物としてまちにストラクチャを与えるものとなる。



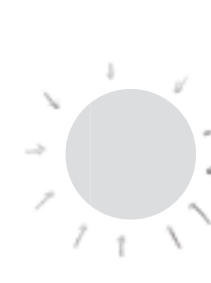
イメージが重なる場所



迂回を与える



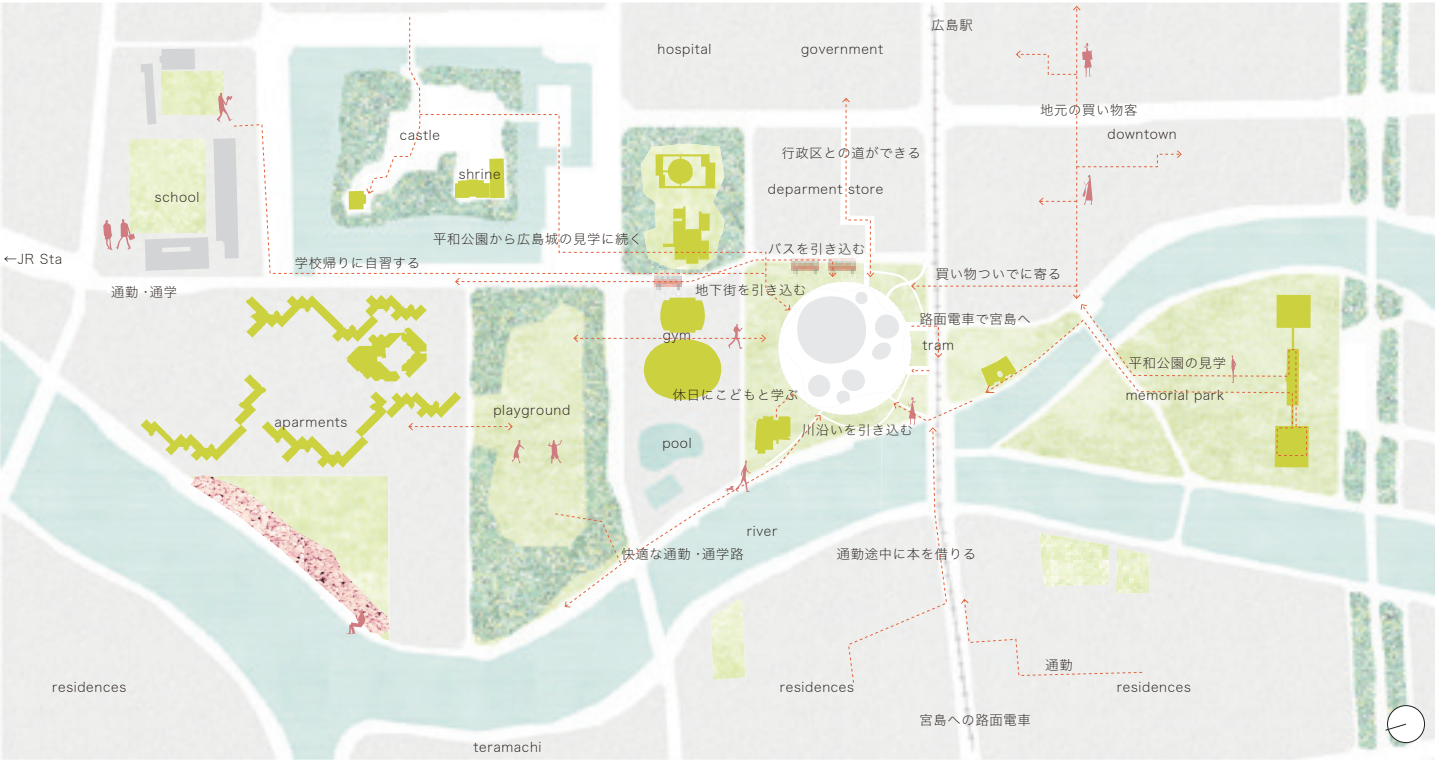
大きい



どこからも同じように見える

The New Image of the City : 広島イメージに加わりながらそれぞれの関係性をつくる

下に示す考え方をもとに作られる建築はこれからの広島歴史に新たに加わるような強い都市的構造とプログラムを有するものとする。都市での経験の共通項となる建築は、次第に広島イメージに加わりながら、街の人たちに馴染み、関係性をつくるようになる。軸線をのみこむほどの大きさの建築は、街での経験のあらゆる瞬間に垣間見え、まちでの経験を意識的にもつなげていく。



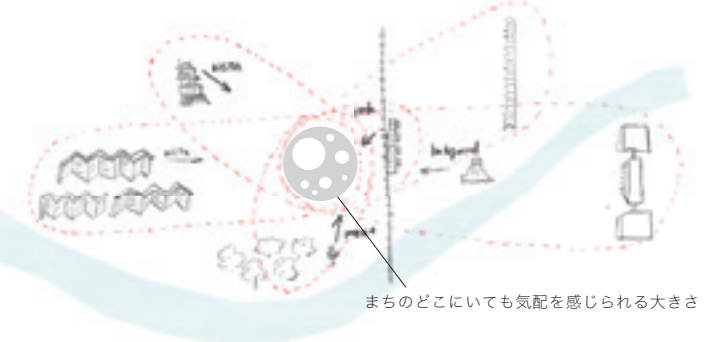
広島イメージに加わる建築が現れる

idea : まちでの断片的な経験に共通項を与える

広島での経験は断片的でそれぞれが不連続である。そこで、かつての市民球場がそうであったように、街のどこからでも気配が感じられ、街での経験の延長線上にあるような建築をつくる。そうすることで、今、目の前で起きているそれぞれの経験が一つのまちでの出来事として捉えられるのではないかと考える。ローマのコロセウムや、街の隙間から見たドゥオモのように、機能やプログラムを超越した唯物的な建築の存在 (ランドマーク) がまちを経験する人々に、まち全体を捉える視点を与える。



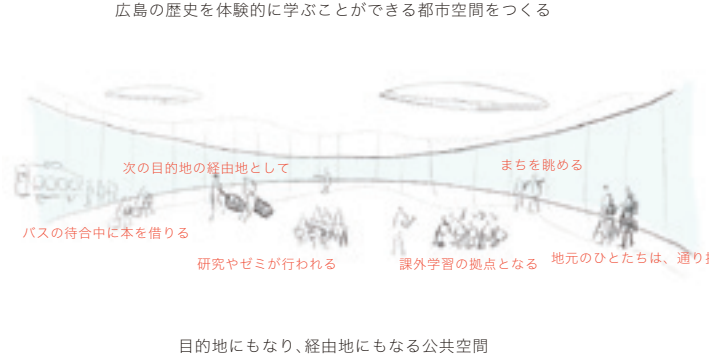
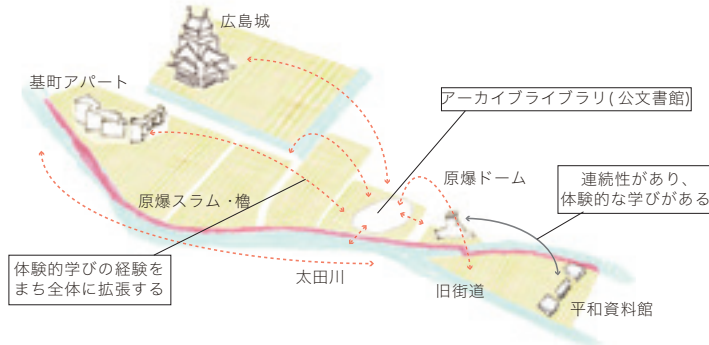
まちのイメージを与える建築



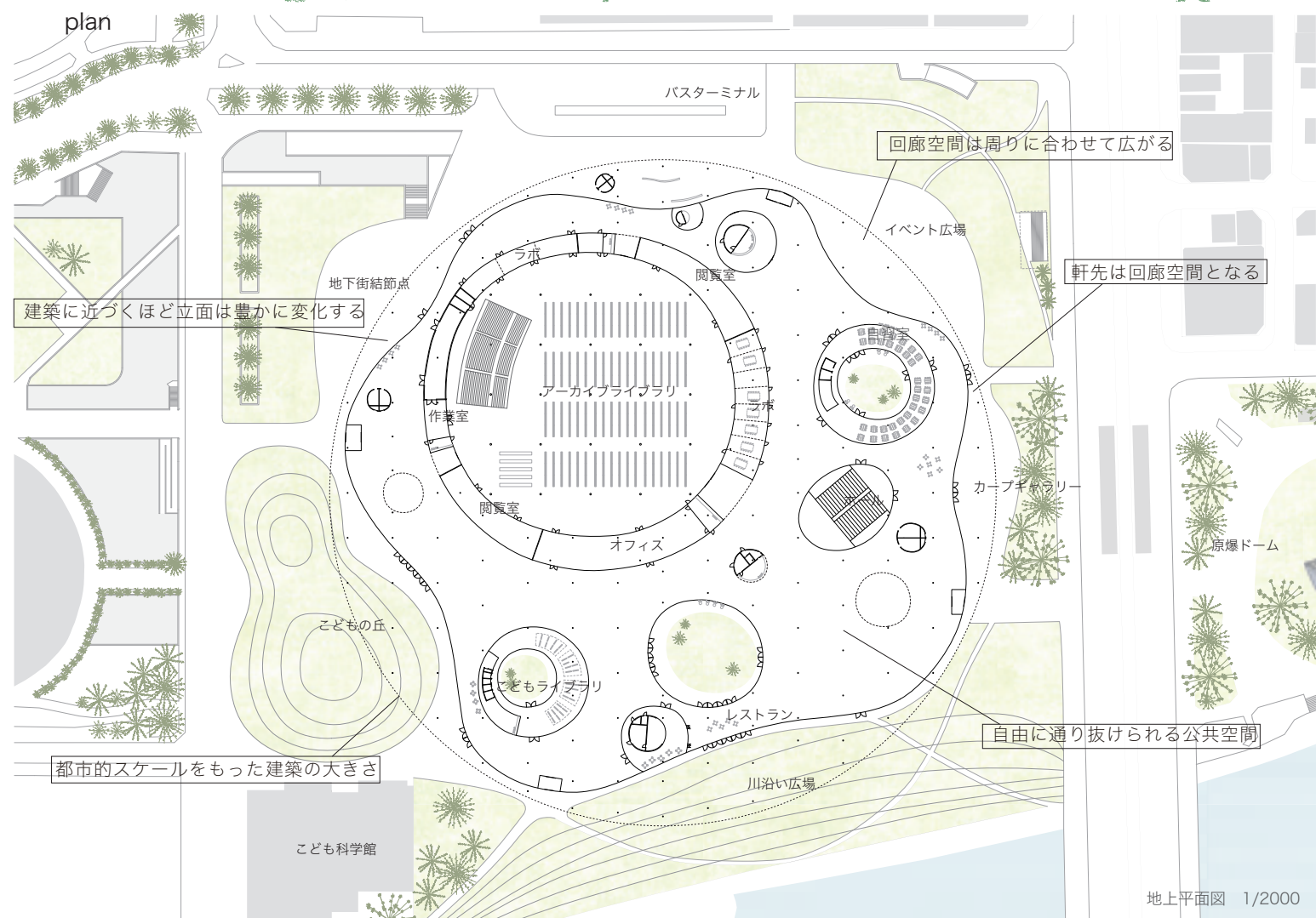
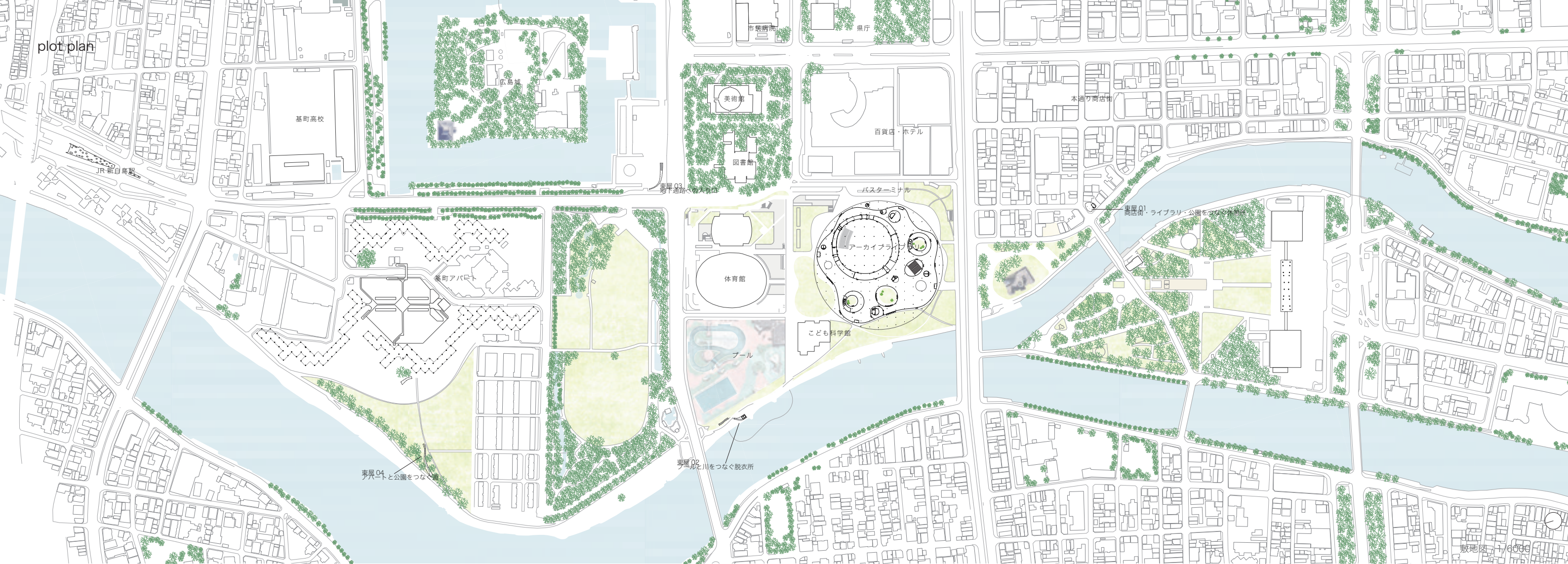
まちから建築を経験する

program : まちをアーカイブするライブラリ(公文書館)

広島というまちは原爆投下によって一度そのほとんどを焼失した。それは本や写真だけでなく建物など、焼き尽くせるものすべてである。今一度、この場所に歴史の断片を集めることで、広島の大きな歴史をアーカイブするライブラリをつくる。また、まちをアーカイブするライブラリが、その歴史の重層性を体現する都市空間と共にあることで、まち全体が体験的学びの場へとかわっていく。

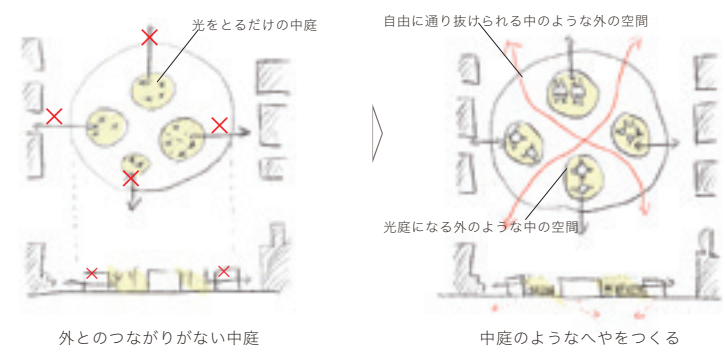


目的地にもなり、経路地にもなる公共空間



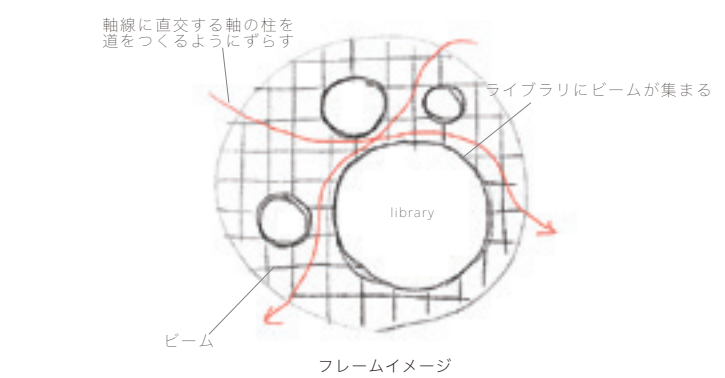
Section : 外のような中、中のような外

大きなワンルームを作る際、採光の問題が生じる。しかし、中庭を作るとすると外（まち）と中庭が分断されてしまい中庭はただの光庭でしかなくなる。そこで中庭を部屋のようにすることで、人が明るい環境で活動を展開できる外のような中と、逆におちついて人が自由に通り抜けられる雰囲気をもった、中のような外をつくる。



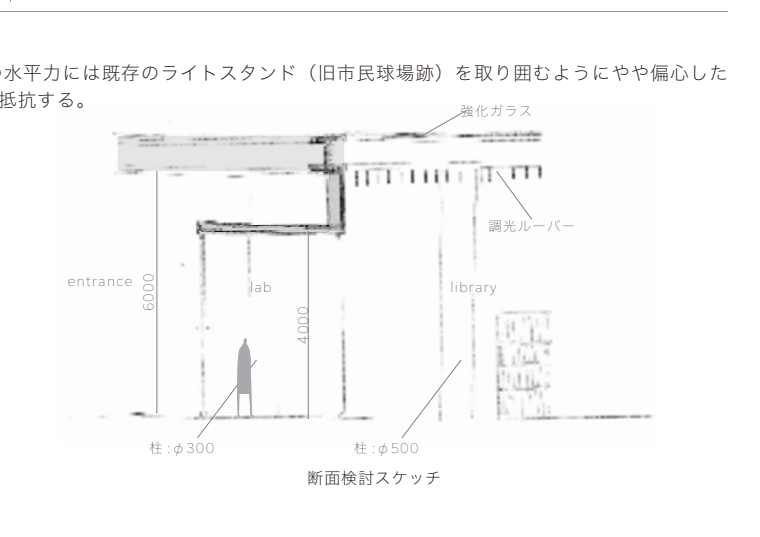
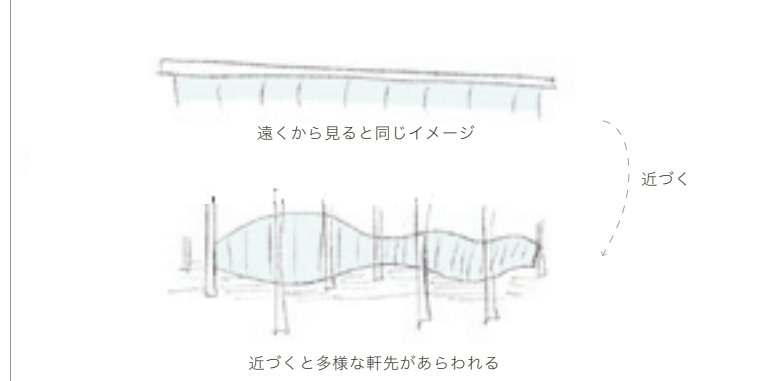
Structure : ライブラリが建築を支える

直径約200Mの大屋根は林のように立つ柱によって支えられる。大きな屋根の水平力には既存のライトスタンド（旧市民球場跡）を取り囲むようにやや偏心した位置にある大きなライブラリ、中庭のようにつくこどもライブラリ、自習室が抵抗する。



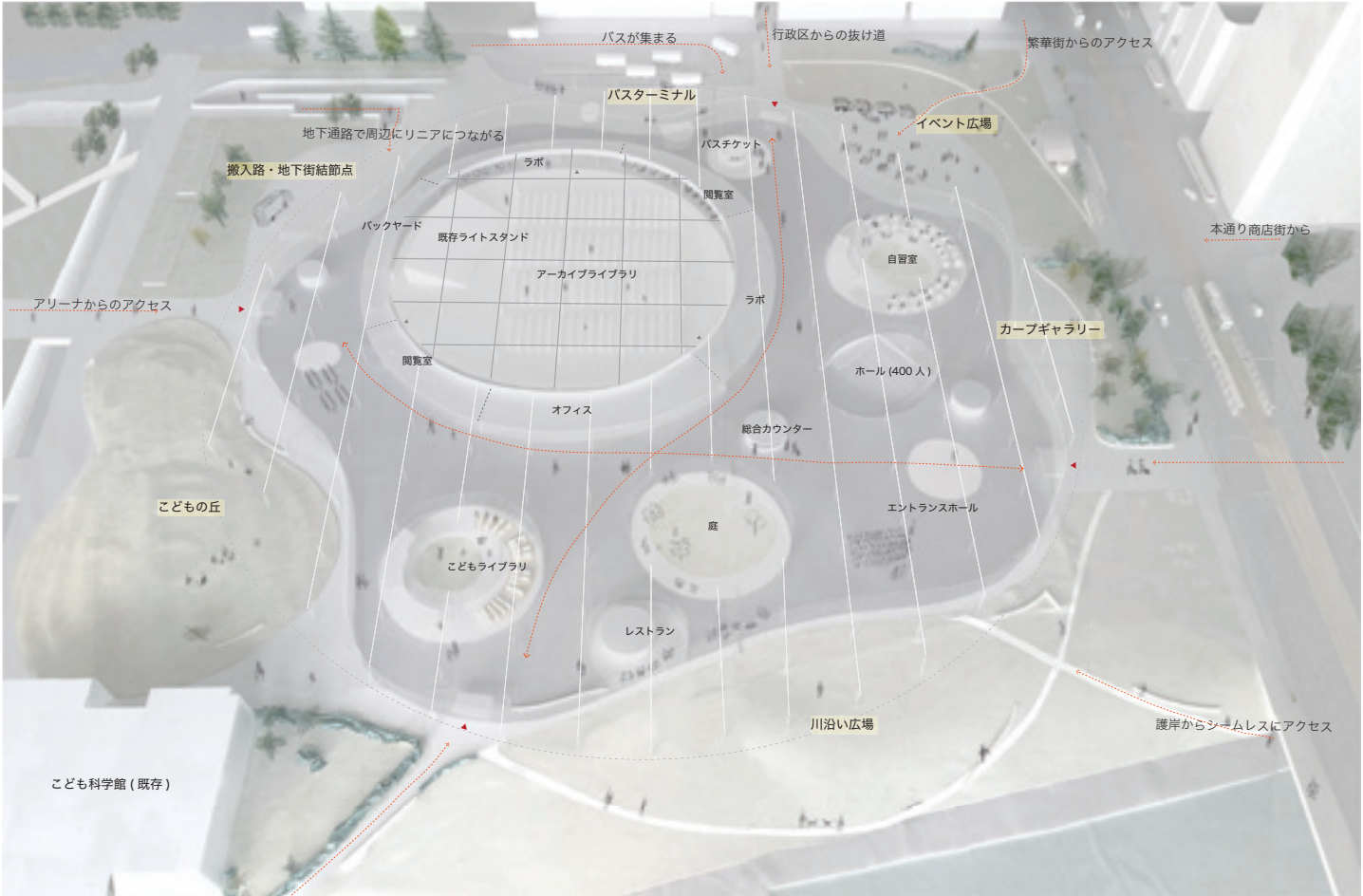
Elevation : 近づくことで変化する、正面のない立面

円形平面による正面を持たない立面は、まちから建築を経験する際、すなわち遠くから見ると、同じようなイメージを与える。しかし徐々に建築に近づいて行くと周辺の豊かさに呼応して軒先空間が形を変える。それにより360°にわたって広島豊かな元の人が集まる立面が生まれる。

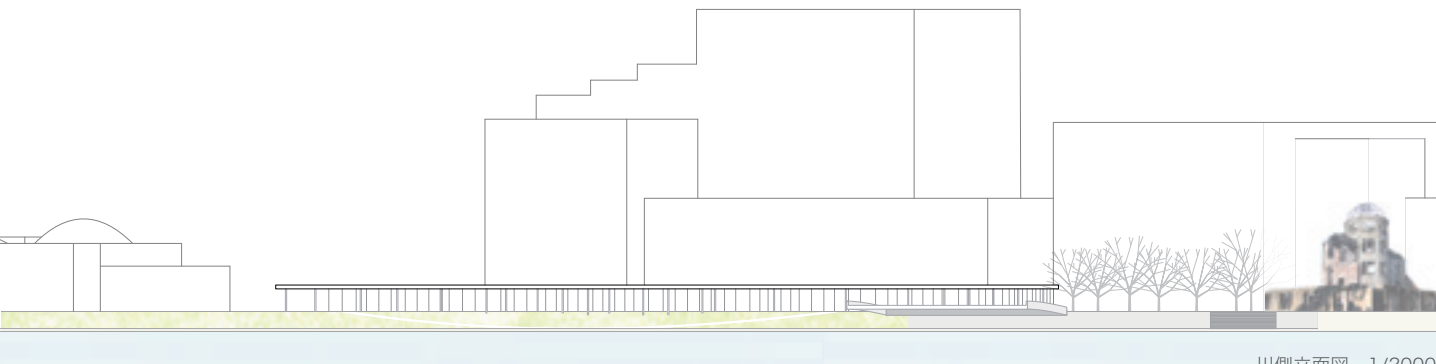


Plan Theme：巨大さによってまちとの多様な関係性をつくる

都市的なスケールを持つ建築は、ただ大きいということだけで周囲との関係性を生むことができる。建物の全周が、周囲とのたくさんの豊かな関係性を持ち、ワンルームの内部空間に集まることで、このまちのアイデンティティやエネルギーが集まってくるような力強い場所となる。



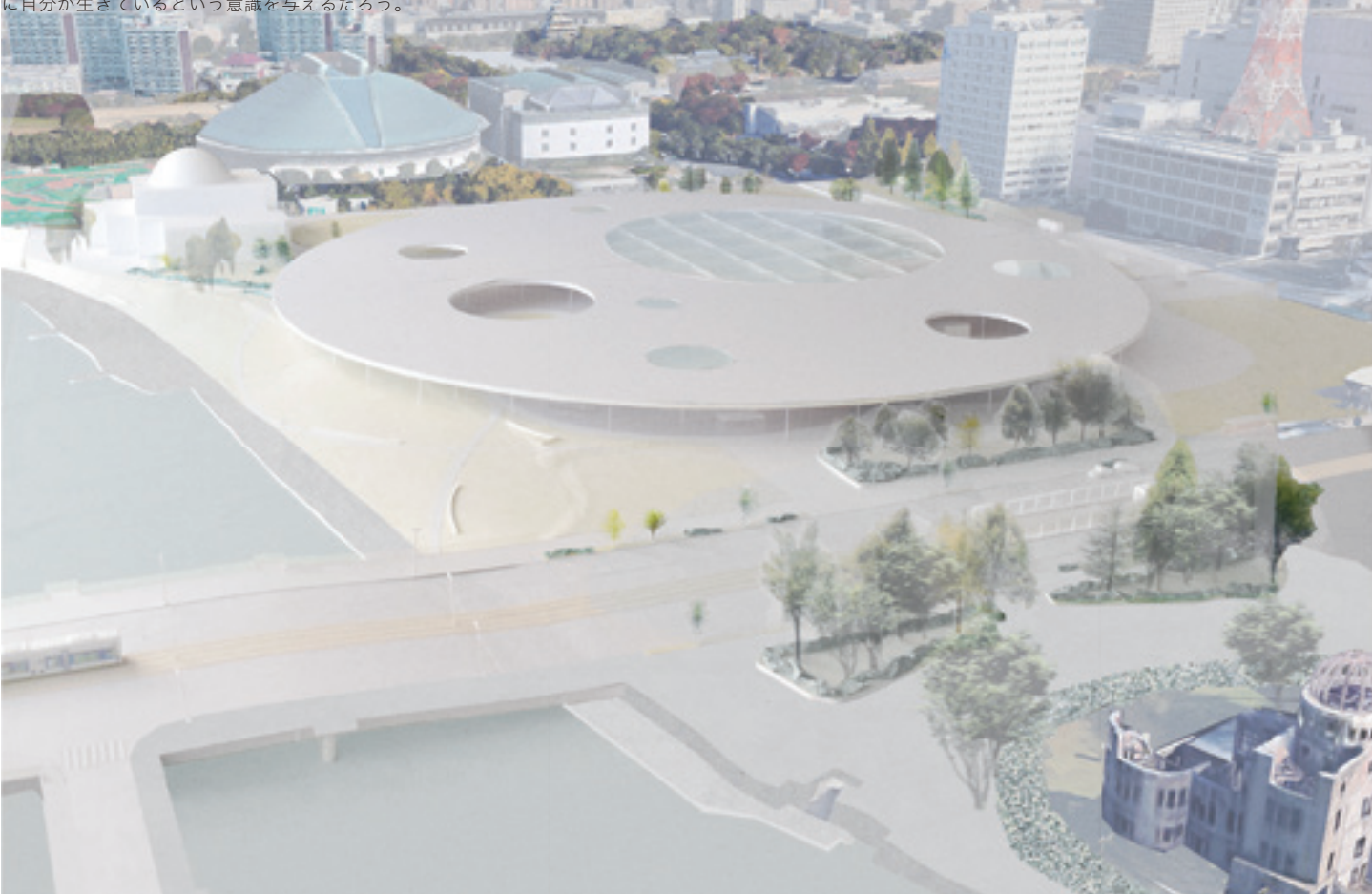
Sequence



川側立面図 1/2000

歴史を共にする新たな広島風景

学校帰りの高校生はここで本を読みながら自学に励み、川沿いで友人と将来について語り合い、商店街でおつかいを頼まれ、路面電車で揺られ家路につく。こうした些細な出来事は広島を生きる人たちに、まちでの経験そのものが、広島という土地や歴史によって育まれた豊かさであることを教え、改めてこのまちの歴史の中に自分が生きているという意識を与えるだろう。



Comments from Classmates

非常に共感。広島埋め立て地が建築史のパレットかのような感覚を呼び起こしながらも、既存のマスタープランを建築で打ち壊すことも可能な作品。建築と都市の歴史が広島城、平和記念公園、基町アパートとともに展開されている。屋根スラブ、柱、流体的なガラス面等、建築を要素に分けて批評的な考察もすると、建築理論としての強度も増すと思います。実際に建った後の2、30年後の未来まで見たいです！

上山源喜

個人的に大学生活で一番影響を受けた人物だったかもしれない。提案に関しても経過を見てきた中で最終的に建築の唯物論的な性格に発展させたのはある種の感動を覚えた。建築が存在すること自体の価値とか、社会への影響とか…。改めて見返してみると、建築の計画の段階でそういった大きな話が薄れてしまっているようにも見えて、卒業設計という提案の話では、全て処理しきる性格が裏目に出たのかなという気もした。しかし、学ぶことの多い作品であった。

上田成夢

広島歴史観を再編するという射程の広い課題に対して、純粋にひとつの建築の「大きさ」によって答えようとしているこの提案が個人的に一番刺激を受けた。7000mmの天井高の正円屋根が120m続く空間も模型でみると美しく感じた。図面やプレゼンもやはり流石だと思ったが、自然の中の居住単位課題から通じる、環境の中での建築の大きさに対する感性がこれまでの作品の中でも抜群だったと思う。これが今後Y-GSAの2年間で更にどのように発展するのか楽しみだ。これまで8年間と長いこれからもよろしく。

前本哲志

広島歴史を背負うという大きすぎる問いに対して、建築を超えて最早都市空間と呼べるほど大きな、しかしひとつの屋根で応えてみせるのは、卒制における自らの中での応酬として誰よりも激しくて、その勇気と手腕を凄いと思う。ただこの応えがまた問いにもなって大きさをどう使うとかこれからは追求していける"原型"だと思う。「ひとつの建築で世の中は変わる」という古い物語をぎっと宮本は信じていて、その信念がみんなにも「もしこれが本当にできたら確かに広島は変わるだろうな」と思わせる迫力になっていた。

石川泰成

個人的に最も印象に残った作品。3年まで順調に課題を進めてきた宮本にしては悩みに悩み、提出の1週間前に大きな一つの円盤が出てきたときには正直懐疑的な印象であったが、最終的にはやられたという印象。広島歴史観を変えるという重いテーマに対し、広島の他の建築群に負けないぐらい強い建築でありつつ、その建築自身は広島歴史から一步引いて広島歴史を解釈するための触媒のようになっている。ただ、今までの歴史を括弧に括った、歴史に参加しない建築はどういう歴史に残るのだろうか。数十年、数百年経ったこの建築の扱いは気になる。

馬場一輝

すごいまじめで客観視するのが上手だなあと。どの作品もちゃんと考えたことが伝わる建築になってて、さっさとやってのけてそうだけちょっとと努力してるんだと思う。最終講評のとき、あの巨大円盤に先生たちが集まって、ちょっと緩んでた講評の場の空気がしまったのを見てすごいなぁと感じました。それだけ人を引きつける建築ってことだと思うので。あと、今までの宮本の作品のなかでも素直にいいなぁと思ったし、ちょっと悔しかった笑器用さが宮本らしいと言ってしまうばそうなんだけど、器用すぎて本心が伝わりづらい状況をつくっているのかな？とだからこそスマートさをちょっと捨てて、めっちゃ人間くさく悩んでるのを見たい気がします。

寺西遥夏